解　説

中村　菜穂

「黒衣の民の王」は、イラン・イラク戦争の時代を背景に、イランの作家フーシャング・ゴルシーリー Hūshang Golshiri（一九三八―二〇〇〇）によって書かれた中編小説である。ここにはその前半部を訳出した。

◆全体のあらすじ

イラン・イラク戦争が始まって間もない頃のある冬の朝、主人公である詩人は、自宅で目を覚まし、かつて政治活動をともにしていた友人アミール・ハーンの葬式に出かけるため、喪服を買わなくては、と思い立つ。彼の脳裏に浮かぶのは、昨日街路で見かけた、戦没した若者を追悼するための「ヘジレ」の数々だ。彼は、最近国外で『災禍の十年』と題した詩集を出版したが、そのために当局に逮捕、投獄される。彼にとって三度目の投獄であり、六〇年代、七〇年代の記憶が繰り返し蘇る。彼が終始思い出すのは、中世の詩人ニザーミーの『七王妃物語』に収められた「黒の円屋根御殿」の物語だ。彼は獄中でサルマドという名の青年と知り合い、彼や仲間たちに詩の一節を暗唱して聞かせるが、処刑の前夜、サルマドは彼にある秘密を打ち明ける。やがて主人公は釈放され、サルマドに託された黒いシャツを着て自宅へ戻ってくると……。

◆背景――革命、戦争、歴史と文学

一九七九年、イランでは西洋化を推し進めたパフラヴィー王朝が民衆の力によって打倒され、イスラーム体制が樹立された。革命後の混乱が続くなかで翌年、イランは隣国イラクに攻め込まれ、八年の長期にわたったイラン・イラク戦争が勃発する。

作品で重要な役割を果たしている「ヘジレ」は文字通りには「新婚の部屋」を意味し、未婚のまま早世した若者の死を悼んで鏡や燈明を飾った小さな山車のようなもので、道端に置かれる。とくにイラン・イラク戦争初期には、多くのヘジレが街路を埋め尽くしたという。作品では個々人への哀悼と、その社会的な意味づけとの葛藤も浮き彫りにされているが、未婚の若者の悲劇的な死というテーマはそれ自体、歴史を辿ればカルバラーの戦いでの第三代イマーム・ホセインの殉教や、それに連なるシーア派の哀悼行事での、人々の感情の発露に結びつく。革命においても、戦争に際しても、こうした民衆の情念が政治・社会の変動に多大な影響力をもったと言われている。（ヘジレの起源や文化について、以下に詳しい考察がある。山田稔「HEJLE考」『大東文化大学紀要』第四二号、二〇〇四年、三一一―三一九）

作品中には、アミール・ハーンや他の人々を通して王政時代の左翼活動家たちの生き様が描かれ、革命後彼らの辿った、逮捕、粛清、国外への脱出、潜伏といった各々の運命が示されている。とりわけイランでは、有名な詩人・作家たちのほとんどが投獄を経験し、厳しい検閲に晒されてきた。そのことは革命前もその後も変わらない。小説の主人公は王政期に投獄され、イスラーム体制下で再び拘束されるが、それらは現実に起こっていたことの一例であるばかりか、太古の昔から繰り返されてきた歴史の一側面でもある。作品中に言及された古典詩人たちもまた、大半が時々の政権に疎まれ、圧迫を受けてきた。この文学と政治・社会をめぐる「伝統」にいかに対峙するべきか。小説の一場面で若い女性が金色の前髪をヘジャーブに隠すように、表向きの順応を示すことが、詩人たちの処世術でもあったことを、作家は鋭く問題視している。それと同時に、繰り返される創作と弾圧の連鎖のなかで、過去の作品を血肉として新たな創作を行い、引用の鎖を繋いでいくことが、この作品の企図を支える作家の詩学であると考

えられる。

◆ニザーミー「黒の円屋根御殿」について

「黒衣の民の王 Shāh-e siyāh-pūshān」というタイトルは一二世紀の詩人ニザーミーのロマンス叙事詩『七王妃物語 Haft peykar』の一節から取られている。同書はニザーミーの作品中とりわけ幻想的かつ妖艶な物語で知られているもので、サーサーン朝のバフラーム王が、七つの地帯から娶った七人の妃を、異なった色の御殿に住まわせ、曜日ごとにそれぞれの御殿を訪れ、王妃たちが物語を語る、という枠物語の形式を取っている。「黒の円屋根御殿」はそのなかの一つ、黒衣を着た托鉢僧の謎を追って旅に出た王が、町中の人が黒衣をまとっている、中国のある町へ辿りつき、そこから妖精たちの住む異界へ旅をする、という物語。作中でも語られるように、この古典作品の「解釈」が、この小説の重要な鍵となっている。(邦訳、ニザーミー『七王妃物語』黒柳恒男訳、平凡社東洋文庫、一九七一年)

◆原書について

本作品はイラン・イラク戦争の終わり頃に書き上げられ、一九九〇年に匿名で、英訳として出版された。その後、九八年に独訳が出版され、作家が二〇〇〇年に亡くなったその翌年にようやくスウェーデンで、ペルシア語版がゴルシーリーの名を冠して世に出された。ただしこの作家「に帰せられる〔作品〕」と記されており、仏訳も同様である。

英訳者のA・ミーラーニーによると、作家は、この作品が国内では発表できないことから、検閲を逃れるために、わずかずつ原稿を封書のかたちでカリフォルニアにいた訳者のもとに送り届けたのだという。また興味深いことに、マヌーチェフル・イーラーニーという仮名は、この作者以前に、すでに複数の書き手によって用いられており、彼らもまた、イラン国外で作品を発表する際にその名を用いたという。それらの記述があることから、本稿では、ゴルシーリーの作品として訳すことにした。また訳出にあたっては、ペルシア語版をもとに、以下の英訳と仏訳を参照した。

Manuchehr Irani, *King of the benighted*. tr. Abbas Milani, Washington D.C.: Mage Publishers, 1990.

attribué à Houchang Golchiri, *Le Roi des Noir-Vêtus*. tr. Christophe Balay, Paris : Inventaire, 2002.

◆他の作品について

現代イランを代表する作家の一人であるゴルシーリーは、とりわけ一九六〇年代末に書かれた小説『エフテジャーブ王子』が広く知られ、映画化されて人気を博した。すでに英訳、仏訳が刊行されており、邦訳が待ち望まれる。作家の経歴や他の作品については、幸いにもいくつかの邦訳と解題があるので、そちらを参照いただきたい。

石井啓一郎・前田君江「イラン現代小説再発見の試み——フーシャング・ゴルシーリー Hūshang Golshirī 第一回」『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第一一八号、二〇〇六年、一一—一五頁。(「葦簾の向こうに」収録)

——「ゴルシーリー小説『無垢なるもの(1)』Mā'sūm-e avval をめぐって—訳と考察—」『イラン研究』第四号、二〇〇八年、一七—四四頁。

——「ゴルシーリー小説『狼』Gorg をめぐって—訳と考察—」『イラン研究』第五号、二〇〇九年、一八—三一頁。

——「ゴルシーリー小説『公序良俗小説』Dāstān-e khūb-e ejtemā'ī をめぐって—訳文と作品解題—」『イラン研究』第六号、二〇一〇年、二七—四〇頁。

フーシャング・ゴルシーリー「小さな礼拝堂」前田君江訳『文芸思潮』第四九号、七八—八九頁。

※本作品のペルシア語版の入手に際しては、パリに留学中の廣田郷士氏の協力を得ました。心より感謝申し上げます。